

つつ「知覺」となるに即しては「知覺する」であり、更には「想像する」「想起する」「推理する」であり、それらを通じて生の現在段階の超出——（自己追及的）自己否定——といふ一面から見られては「意志する」であり、最も包括的にはつまり「意識する（思ふ）」であるが（「意識」にせよ「おもふ」にせよ、夫々少くも文字の上乃至言葉として、廣義の「知る（考へる）」と「欲する（慕ふ）」とを含んでゐるといふことは、最も直接なるものの自覺に於ける作用知としての根本的な二面相即性と照らし合はせて意味深く、かういふ所にも屢々謂はれる我等東洋人の綜合的直覺的な、悪く云へば分析の曖昧な、ものの感じ方が表はれてゐるとも見られるのであらうか）、感覺的乃至感情的性質の如上の定位に準じて、このもの自身の定位はいかに考へらるべきであるか。（未完）

寄贈雜誌

九月號 哲學雜誌、思想、理想、文化、丁酉倫理講演集、法學論叢、經濟論叢、法學、一橋論叢、學校教育、社會學徒、國民醫學、湖畔の聲、文化日本、全人、日本世紀、資料戰線、同教、關西大學新聞

次	目	號	前
有と知（空前）……………	文藝士	山田次郎	
教育の主體……………	文藝士	前田博	
人種、民族、國民と……………	文學士	高山岩男	歷史的世界